



TITLE:

清代國家財政における中央と地方： 酌撥制度を中心にして

AUTHOR(S):

岩井, 茂樹

CITATION:

岩井, 茂樹. 清代國家財政における中央と地方：酌撥制度を中心にして.
東洋史研究 1983, 42(2): 318-346

ISSUE DATE:

1983-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153894>

RIGHT:

清代國家財政における中央と地方

——酌撥制度を中心にして——

岩 井 茂 樹

はじめに

一 雍正初年までの制度

二 動支、挪移、虧空

三 酌撥條例とその體制

四 酌撥制度の崩壞

おわりに

はじめに

光緒三四年（一九〇八）、清朝中樞は紊亂した財政の改革によりやく着手した。「先ず辦法を明定せん」ことを請う度支部の上奏に對してなされた、軍機大臣の長文の覆奏の一節につきのように言う。^①

我が國家、幅員は廣大、財賦は殷繁、理財の權は、外にしては以ってこれを疆吏に責め、内にしては以ってこれを（戸）部の臣に統ぶ。前人の立法、周からずとはなさず。……度支部は全國財政總匯の區となす。宜なる乎、内にしては各衙門、外にしては各直省のあらゆる出入の款目、周知せざるは無し。而るに今は竟に然らず。各衙門の經費、往往にして自ら籌り自ら用いて、部中は多く與聞せず。各直省の款項、内銷は則ち部に報（銷）するも盡く虛文に屬し、外銷は則ち部中查考するによしなし。……各省の財の若きは即ち全國の財なり。何ぞ漫として統紀なかる可けんや。然れども外省は財用の寔數において毎に隱匿し、部をして知らしめず。故に部中つねに其の相い欺くを疑い

て、内は外を信ぜず。部中は外省の款項において、つねにそれをして寔に據りて報明せしむるに、決して提用せざるを聲言するも、報出におよばば往往にして食言す。故に外省つねに其の相い誑くを畏れて、外は内を信ぜず。……

五十年來の財政權の分裂と混亂は、義和團事件賠償金の支拂を議定した辛丑條約をへて、ここにのべられたような末期的症狀を呈するに至った。近代科學問で武裝した同時代の外國人觀察者は、清國の財政が、「極端ナル地方分權制度ヲ採用」(『清國行政法』第五卷 一九一一、頁二九八)し、あるいは、「戸部ハ……實際地方財政ニ關與スルコトナク、唯ダ中央北京朝廷ノ財務ヲ司ルノミ」(『支那經濟全書』第一輯 一九〇七、頁四三九)と述評する。H・B・モースも、大清帝國の國庫は、一部の税目がその直接收入であるのを除き、他は地方の行政費、徵稅費の餘剰にたよっているとし、これを聯邦制下のドイツ第二帝國の國庫負擔金(Matrikulbeitrag)制度に類似したものと述べている(The Trade and Administration of China, 1907, pp. 48, 84)。

これは清朝財政の現狀分析としては、正しいであろう。だが、その財政制度が當初よりかかるものであったのか、またそうでないとして、いかなる過程をへてこうした狀態があらわれたのかについては、さほど興味を示していないようである。しかし、さきの引文中の「周からずとはなさざる」の「前人の立法」とは、現在の紊亂をきわだたせるための單なる修辭であるとするのは、やはりできない。では、戸部はいかにして理財の權を統轄し、全國財政總匯の區であることを可能にしていたのであろうか。また戸部と各省との財政權上の關係はどうであったのだらうか。私は酌撥制度の果たした機能を考えることによって、こうした問題に光をあてようと思う。清代の財政は、いずれの時代においても同様であろうが、極めて複雑である。問題を限定し、對象をうまく整理したうえでなければ、考えの糸口さえつかめそうにない。そこでここでは議論の對象を國家財政に限ろう。私は國家財政を、正額錢糧もしくは廣義の正項錢糧にかかわる財政の體系であると考えている。それ以外の財政の體系と、國家財政との關係については、本文中で説明することにしよう。

清代、正規の稅收の主要な源は、州縣で徵收される地丁(雜稅課を含めていう)と、特設官廳によって徵收される鹽課、關稅

(常關稅)の三つである。いずれも地方各省で集められ、戸部銀庫の直接収入は捐納などを除いてほとんどない。地方での稅收は、一部はその省内で支出され、一部は戸部へ送られ、一部は協餉として他省に送られるが、その際に留支、京餉、協餉の銀數はなんらかの方法によって調節され、各省および戸部銀庫の收支平衡が、個別的にまた總合的に保たれているはずである。ある省の起解すべき京餉、協餉の數量がその能力を超えていれば、それは實行されないか、あるいは留支の削減、稅糧の加派などの手段によって補われることになる。また留支も、これが各省で自由に行なわれれば、戸部の財政も、收入不足の省の財政も、たちどころに破綻することになる。したがって各方面での平衡を、共通の財源のうちで、しかもほぼ稅課の徵收と同時に、はかる必要があるわけである。この問題は、制度的に必ず解決されているはずである。こうした制度について、はじめて論及したのは彭雨新氏であった。^② 地方における稅賦の收支は、中央の命令によって行なわれ、各省での支出分以外の餘剩は、「解款協款制度」にもとづいて、一部は鄰近の省へ、一部は中央へ送られる。この撥解に際して、解款、協款の數量調節のためにあるのが、「冬估」と「春秋撥」の制度である。解款、協款の銀數は、やみくもにわりあてられるのではなく、前年の冬に各省より次年一年間に支出すべき俸餉の額を造冊して戸部にとどけさせたうえで(冬估)、春と秋の二度、各省の銀庫中の現存銀數を報告させ、それぞれ半期分の豫算支出額に充當すべき分、および他省への協餉分を除いて、他は戸部の指令で戸部銀庫へ送られる(春秋撥)。こうして、各省の收支および解款協款は、中央が統一的、計畫的に支配し、各省で獨自に財政計畫がたてられ收支平衡がはかられるのではないという、きわめて傾聴に値する見解が提示されたのであった。^③

彭氏の論文は、清朝中央の地方財政支配が、ここに略述した「撥」の原則(撥とは、一部をさいてわりふる、というほどの意味)から、太平天國期をへて、「攤」の原則(攤とはわりあて)へと移り變ったこと、およびそれ以後の中央—地方の財政關係の分析を目的としたものであり、道光時代以前の、いわば傳統的な清朝の財政支配のあり方——「撥」の原則——については、『戸部則例』中の二條の規定をよりどころとして分析を加えるにとどまっている、勿論、そこでは奏銷、留貯や

耗羨動支などの諸制度も含めて論じられてはいるが。「解款協款制度」の根幹をなす「多估」、「春秋撥」について、それが重要な意義をもつ、と語られているだけに、行政法規上の分析だけでなく、その制度創出の背景や運用の實際に即して、分析を加える必要があるように思われる。

一 雍正初年までの制度

春秋撥制が、彭氏の述べるようなかたち、すなわち『戸部則例』で規定されるようなかたちとなったのは、雍正年間のことである。では、これ以前においては、留支、京餉、協餉はどのようにして調節されていたのであろうか。この問題について、遺された史料のなから、明確な答えを引き出すことには相當の困難をおぼえる。清代の政書類、また實錄のなかにも、はっきりとした規定を見い出せないのである。ここでは清初からの財政措置を検討してゆくことによって、手がかりを得ることとしよう。

順治前半は、戦費の支辨のため、通常の財政が行なわれるはずもなく、随時の税糧加派も激しかったようであるが、そのなかで、徴税・起解の額は前朝のそれによるという原則が、しきりに提示される。明代に、一條鞭法の施行にともなって出現した賦役全書は、州縣において諸税目を一括するかたちで徴收された銀兩・米穀を、本来の設税の名目と數量ごとにふりわけて支出するためのものであったと考えられる。清朝も入關當初より、「地畝錢糧は、ともに前朝の會計錄の原額に照らして」、徴收・起解する、という原則を、平定地域において順次適用する方針であった。福王を捕えた時に、多鐸にあたえられた敕には、^⑤

錢糧のまさに徴^{とらたて}るべきものは、常に照らして徴收し、まさに京に解^{とく}るべきものは、常に照らして運送せよ。……
 いっさいの緊要なる圖籍は、ともに收藏して失うことなからしめよ。

とあるが、「常に照らして」とは、明代の額のとおりにと言うに等しいであろう。別の箇所では、「萬曆年間の則例に照ら

して」^⑥、あるいは更にはつきりと「萬曆年間の賦役全書に照らして」と述べられており、明代の賦役全書がそのまま徴収・起解のよりどころとされていたことがわかる。順治三年三月には、新たな賦役全書の作製が命ぜられ、戸部では侍郎王弘祚がその統轄の任にあたることとなった。^⑧これはようやく一五年になって完成をみたようであるが、それまではひきつづき明代のものが用いられていたであろう。ともあれ順治末年に各地で作られた賦役全書は、康熙二三、二四年の間に「簡明賦役全書」として改訂され、以後十年毎の修輯が定められた。実際には、十年毎にという規定は實行されなかったが、雍正一二年には改訂がほどこされていることから、財政事務のうえで一定の機能をはたしていたことは確かである。黄六鴻も徴税に際し、「惟だ全書と、(布政)司の核(定)めた會計冊とは、東南(地方)では少くべからざるを必ず」^⑨『福惠全書』巻六頁二と述べている。しかし、賦役全書の額に照らして徴収・起解を行なわせることによって、戸部は地方の收支を統轄し、全國的な財政上の調節を行なうことが可能であつたろうか。不可と私は考える。

州縣の地丁錢糧と起(運)・存(留)の款項は、一入一出もみな定制ありて、原もと毫末の參差も容るることなし。^⑩と言われるように、賦役全書は各州縣ごとの、徴収すべき税目、數量、および支出項目、數量を非常に細かく載せたものである。しかし、つまるところそれは州縣での起運(布政司庫へ搬入すべき税賦)と存留(州縣での支出分)の額を定めているにすぎない。徴収すべき實額は年々變動するから、全書の數字はそのまま適用できない、という點には目をつぶらう。^⑪存留、起運とも額にしたがつて行なわれたとしても、布政司に起運されてからのちの起運錢糧の處置については、一部の款項を除き、そこには指示されていないからである。もっとも、たとえすべてを指示してあつたとしても、布政司での支出を、州縣の存留錢糧のように、すべて固定した額にしたがつて行なうことは不可能である、と言わねばならない。あとで再びふれるが、布政司での正額錢糧の支出の弾力性は、州縣のそれよりはるかに大きいからである。

また順治八年以後、しだいに奏銷制度が整備されるが、奏銷とはその本来の性格からして、各省で「正收正支」が行なわれているか、すなわち指示や定則のとおりに行なわれたかを戸部が事後にチェックするためのものであつて、錢糧の支

出、起解をそれによって行なうものではない。賦役全書や奏鎖冊だけでは、全國的な調節を行ないえないのである。

實錄の康熙二年五月丙戌の條に、給事中吳國龍の奏請にもとづいて、左のような決定が下されたことが見える。この規定は簡單ではあるが、注目に値する。

直隸各省の京に解る各項の錢糧は、順治元年より起き、すべて戸部に歸す。七年に至りてまた各部寺をして分管して催收せしむるも、款項の繁多なるをもつて、姦弊を滋^はせ易きを致す。請うらくは、康熙三年より始めとなし、あらゆる雜項はともに地丁錢糧と稱して、十分の考成を作し（十割徵收を勤務評定の規準とする）、毎年正月に兵餉を扣撥するを除くの外は、その餘は通て戸部に解らんことを。……各部寺衙門のまさに用うべき錢糧は、年前に數目を具題

し、次年に戸部において支給し、仍りて年終に核報（會計報告）せしめん。

各部寺の財政上の獨立は明代の制度を襲ったものである。この年にそれが改められ、戸部に預算を提出し支給をあおぐうになった。また解款制度についても、簡單ではあるが、一つの原則が示されている。「兵餉を扣撥する」とは、一年分の兵餉に支出すべき額を定めて、その年に起運されてくる地丁錢糧などのうちから、どの財源からいくら出して、その兵餉の額に充當すべきかを、戸部が指撥しておくことである。正月は會計年度のはじめであるから、預算として、兵餉の額とその財源とを前もって定めておいて、兵餉への支出を認めたもの以外は、戸部へ送りせようという趣旨である。ただ、布政司庫からの最大の支出項目は兵餉であるが、他にも官僚俸役食、河工など缺くべからざる支出項目がある。それが兵餉と一緒に「扣撥」されたや否やは、確認できない。

また、収入不足の省への協餉についても、それが正月に戸部によって措置されていたことが、汪琬の題本覆稿（康熙七年）^⑬に、

査したるに、各省の最も貴州に近きものは湖廣に如くはなし。ただ湖廣の錢糧はさきに行（文）して、儘く雲南へ解らしめたれば、則ち就近の省分の別に協（濟）すべきなし。ただ江西・江南ありて、これを別省に較ぶれば、貴州よ

り距たること、差や遠からずとなす。ここをもつて江西省の銀十三萬兩、江南省の銀十七萬兩をもつて解濟せしむ。さきにすでに臣（戸）部正月撥餉の時に於いて題明して案にあり。

とあることから知られる。もつとも、この「正月撥餉」の制度は、康熙三年より實施されたのではなく、既に順治年間より行なわれていたようである。^⑭

戸部による兵餉の指撥に際しては、外省より前年のうちに、次年度の兵餉の額を算定し、これに對して財源を指定（指撥）するようという請求が題本によつてなされていたこともたしかめられる。右に引用した部分につづいて、

その兩浙および上元（縣）等の項の鹽課銀十五萬兩（が貴州へ協濟されることとなつたのは）、黔撫羅繪錦上年十二月に見銀を撥給せんことを題請せるに、臣が部は七分分の錢糧を（指）撥せんと欲するも、ただ起解の遲悞するを恐れ、遂に六年（分）の存する所の鹽課、ともに撥し贍したる見銀に屬するをもつて、（戸部の咨）文の到りて（何箇月までに貴州にとどくようにと）限りて、速解せしむるに繋る。

とあるのは、こうした事務上の手續きのことを述べているのである。また雍正二年正月二八日の戸部題本中に引用された、四川巡撫蔡挺の題本では、成都の駐防八旗の軍官・兵員の俸餉、馬匹の豆草、白米の折價として、一五〇、四一二兩餘が「請撥」され、戸部はそれに對して「……等の項の銀兩は歲需の項に係れば、合に本省の各案存庫銀兩……兩餘を撥給すべし」、そして支出した銀數は、當該年の兵馬奏銷冊に進入して報銷し、戸部の査核をうけよ、との決定を下したことが見える。^⑮巡撫からの支出算定と「請撥」を経て、戸部がその認可と財源の指定（指撥）を行ない、年終にはそれが奏銷される、という處理過程を想定できる。また雍正元年までには、巡撫からの「請撥」は、「預估冊」を造冊して、前年十月内に戸部へ送ることによつてなされる、という定例が、施行されていたことが確認される。^⑯

外省でこうした支出預算を算定（估餉、預估、估撥）し、支出したのちには、各州縣、府から提出される會計冊（縣、府の草冊）をとりまとめて奏銷冊——御覽に付せられる黃冊と、戸部へまわされる清（青）冊がある——を作製するのは布

政司である。勿論、布政使には題本を上る権限も、戸部へ直接咨文を送る権限もないので、表面に出るのは、巡撫と、それに會銜する總督である。

右に述べたような制度の成立年次を特定することは、今のところできないが、これによって各省は、原則的には毎年「正月撥餉」に遑って、正額錢糧の留支、協餉の起解を行なうこととなっていたのである。

では、各省で留支された錢糧、および他省の支出にあてるため協解されたものの外に出る餘剩錢糧に對して、戸部はいかなる方法でこれを管理していたのであろうか。戸部銀庫は、「天下財政の總匯であつて、各省で歲ごとに（人民の）輸す田賦・漕賦・鹽課・關稅・雜賦は、本省に存留して支用するもの以外で、凡そ起運して京に至るものはみなここに入る」と言われている。ここに地方から起解される銀數については、羅玉東『中國釐金史』に、戸部銀庫大淮黃冊によつて、雍正二年より咸豐三年までの統計がかかげられている（頁六、七）が、それ以前については斷片的な史料しかない。實錄の康熙四八年十一月庚辰の條には、收入一、三〇〇萬兩、支出九〇〇萬兩とあり、また王鴻緒の密繕小摺に收入一千餘萬兩とあることから、だいたい一千數百萬兩の收入があつたと思われる。常例の捐納などが直接收入である以外は、すべて各省の布政司、鹽運司、稅關などより起解されたものである。

これに對し、戸部銀庫より直接支出される銀數についても、史料は乏しい。『雍正元年四柱清冊』^②では、その一年のうち、銀兩によつて支出されたものは、一、〇三五萬兩餘りであり、さきの實錄の九〇〇萬兩と考えあわせて、平常一千万兩前後と見積つてよさそうである。^③ここから中央各衙門の經費、京營八旗の兵餉、盛京戸部への協款などが支辦されるわけだから、清朝の命脈の存する所と言っても過言ではあるまい。しかも各省で支出される分、および挪移、侵欺によつて虧空となつた分と、戸部へ起解される分とは、基本的に同一の財源から出るのであるから、競合關係にあると言ってもよい。^④

雍正年間に春秋撥制が確立する以前は、中央戸部はいかにして、この京餉起解分を確保していたのであろうか。康熙二

年の規定では、「兵餉に扣撥するを除いて、餘は戸部へ送る」となっているが、これほど簡単に事が運ぶわけではないのである。

私にはまだ不明確なところもあるが、だいたい以下の如くであったろうと考えられる。年間の解京錢糧一千數百萬兩のうち、一定部分は、常例として解京の額が定まっていたものがあつた。明代制度では、額派中の金花銀と、歲派、坐派などのうち、京師や邊境へ送られるものとは、もっぱら額を定めて各省へわりつけていたのであるが、その一部は清代の賦役全書中にも、同様に解京の定額分として記載されていたのである。清代前期にこの定額がいかほどであつたかを、直接示す史料はないが、王慶雲のあげる「各省の例解の部、款一百二十萬、常捐・旗租・減平二百餘萬」という數字は、道光末年の實狀にもとづくにせよ、一應のめやすとはなろう。この部分は、未徵、虧空とならない限り、戸部は放っておいても、毎年受け取ることができるわけである。

しかし數量の點でも、またどうやって確保するかという點でも、更に重要なのは、定額分以外の京餉である。確保の方法について、まずこれを奏銷のなかに窺つてみよう。康熙□年（殘缺）^{②④}の戸部題本中に引用された山西省康熙五三年分の奏銷によると、額徵地丁銀二九五萬餘兩に對する「支用各款」として、まずはじめに、

一、給協解陝西・甘肅五十三年兵餉銀、六十六萬兩(A)

欽奉上諭案內撥給甘肅兵餉銀、二十萬七千七百四十二兩(B)

一、給解部銀、五十萬四百七十八兩(C)

とあり、以下本省内での支出各項が續いたのち、一、虧空、一、（額徵に對する）未完地丁等項が記される。そして末尾には、

一、存剩地丁等銀、四十八萬四千一百六十一兩(D)

とあり、戸部はこれを、「應に該撫に行（文）して、作速に部に解らしむべし」と述べている。これらのうち京餉となつたのは(C)と(D)である。(A)、(B)はともに協餉であるが、その手續きは異なっていた。おそらく、(A)は戸部の「正月撥餉」

において命ぜられたもの、(B)はそれとは別案の「上諭」によって命ぜられたものであろう。京餉である(C)も、「正月撥餉」、或いは別案の「上諭」によって——恐らくは前者、しかしこの違いはさして重要でない——預め起解を命ぜられていたと考えられよう。すなわち、兵餉や協餉の扣撥と同様に、預算として京餉に充當すべきことを指示されていた、と私は見る。(D)はその年度内の餘剰であつて、年度末から數箇月後に上達される奏銷によって戸部に報告され、その處置は事實上戸部が決定するわけである。²⁵⁾

右でみたのは、地丁項下錢糧に關する措置であるが、鹽課の奏銷に際して、庫存銀數を記して、「まさに該(巡鹽)御史をして庫に貯え、戸部の(咨)文を候ちて、餉に撥すべし」との語がみえる。鹽課や、そして恐らく關稅などについても同様であつた、と考えられよう。²⁷⁾

京餉起解の時期については、雍正元年二月一日、兩淮巡鹽御史謝賜履題本中に引用する戸部咨文に、直隸・山東・河南・山西・江南・江西・浙江・湖廣等の省の銀兩は、春秋二季において撥解すべし。この起解の限期は、直隸・山東・山西等の省は、(咨)文到りて六十日(内)に部に到り……とあることによつて、春秋撥解制定以前より、春と秋の兩季に行なわれていたことが知れる。²⁸⁾

戸部の國家財政に對する監督と支配を保障するため、雍正初年までに、おおむねここで述べてきたような、制度上のわくが設けられていた。戸部と各省の間の財政關係については、左記のようにまとめることができるであらう。

一、「一省財賦の總匯」である布政司は、一年間に支出すべき兵餉銀數を年度前に算定して、巡撫がこれを戸部に、十月までに冊報する。戸部はこれに對し、みこまれる收入のうちから、それに充當すべき項目と數量を正月に指撥する(估餉―部撥制、これが整備されて、彭雨新氏の言う冬估制となる)。

一、收入不足の省への協餉も、見こまれる黒字分のうちから、正月の部撥、あるいは別の機會に指示をうけて實行される。

一、戸部銀庫の収入は、(イ)常例捐納などの直接収入、(ロ)例解部款として賦役全書に定額のあるもの、(ハ)協餉と同様に、見こまれる黒字の内より起解を命じる京餉、(ニ)奏銷に際し、年度内未支給のものと、黒字になったものより起解を命じる京餉、がある。

總之、各省の兵餉、京餉、協餉は、年度内に見こまれる収入のうちから、あらかじめ戸部の指撥を受けた額にしたがつて支出され、次年に奏銷でもってその實施狀況を報告して、戸部の承認を受けたのである。こうした手續きによって、戸部は各省の出入を支配し、かつ全國的な財政の平衡をはかろうとした。しかし、見こみどおりに収入が得られるとは限らないし、また部撥を受けた款項以外に、臨時の支出があることも當然考えられる。すると、あらかじめ定められた京餉、協餉が、額のとおりに起解できないという事態も生じるであろう。右の制度には、こうした問題が内包されていたことが、豫想されるのである。

春秋撥制は、先行するこれらの制度を前提として、登場してくるのであるが、その意義を明確にするため、いま一度、雍正初年までの制度のもとにおいて、具體的にどのような問題が生じていたかを、次章で考察しよう。

二 動支、挪移、虧空

戸部が全國の財政を統轄するにあたって、財政事務上の決定を下し、外省の巡撫などに指示を發するため、よりどころとなるのは、各省からの報告である。戸部が各省の財政狀況を正しく把握してこそ、戸部の下す指示が、繪に畫いた餅となるのを避けることができる。怡親王允祥の奏摺に、^③

本（戸）部の錢糧は、全て外省の題疏・咨文をもつて據りどころとなし、必ず内と外と畫一、前と後と相い符して、

方めて項款清楚にして、あらゆる支給・撥解の項も遅延・錯誤を致さざるを得。

と、地方からの題本、奏疏や咨文による報告の重要性を言うのも、これによる。

順治時代より、各省で賦役全書を作製して戸部へ送らせたり、奏銷冊、估銷冊などを毎年定期に造冊して戸部へ報告する制度が、整備されてきたのは、前章でみたとおりである。しかし、このいくつかの措置を講じただけでは、戸部が外省の正額錢糧の出入を制し、京餉、協餉の起解を戸部の指示どおりに實行させることは、やはりできなかった。怡親王は雍正二年一月二六日に上った奏摺「爲請定酌撥條例事」^③の冒頭で、現行制度のうちに存在する問題を、次のように指摘している。

臣が部の毎年の春秋二撥、年終大撥の舊例には、各省の本年額徵錢糧、および各年各案の登記（濟み）銀兩を按じて、通計して酌撥す。しかるに各省の本年額徵は、いまだ奏銷をへざれば、徵收して庫に存するの數、多少なるを、確知する能わず。その各年各案登記銀兩も、本省あるいはすでに別案において動撥するも、またいまだ奏銷をへざれば、部内の登記よりいまだ開除されず。故に部撥の欸項は、各省の撫臣、あるいはすでに動支せるをもって、あるいはいまだ徵收をへず、撥給に數らずをもって詞となし（部撥に従わない）。

けだし、部撥の欸項は、定例において必ず指す所の何の項に照らして動用し、藩庫にたとえ別項の、庫に存するものもあるも、部の指す所にあらざるを以って、あえて擅に動かさず。故に往往にして（戸部へ）咨（文）もて改撥を請う。査するに、各省の兵餉・驛站・官役俸工等の項は、みな月を按じて支（拂）い、その別省の協餉も、また時日を稽けるべからず。乃るにひとたび咨（文）題（本）もて改撥すれば、往返やもすれば數月を隔て、既にして兵餉において誤つことなかることあたわず、しかも別項のすでに徵（存）せる銀兩も、徒に藩庫に貯えて、恐らくは反つてあるいは虧空を致さん。これみな部内の、各省の寔在に庫に存する欸項・數目を知らざるによる。

戸部は、收支に餘裕のみこまれる省に對して、あらかじめ算定された額にしたがつて、春と秋の二度、京餉の起解を指令する。春季に起解さるべき銀數は、前年の下忙徵收期以後に徵收されて布政司庫に起運されているはずの錢糧數目と、その年の正月撥餉にしたがつて、留支、協解されるべき數目とをにらみあわせて、算定してあるし、秋季のそれは、その年

の上忙徴收期以後の見こみ収入と支出について、同様に算定されている。しかし、その算定のよりどころとなるのは、戸部がその時までには入庫済みである、と考えた数目であって、京餉の撥解を行なうその時点に、實際に庫中に現存する銀數とは一致しないのが普通である。また戸部の知らないうちに、別項に支出されてしまった銀兩もある。そこで、怡親王が述べるような弊害が生じるわけである。

いかに奏銷制度が整備されても、それは事後報告にすぎず、估餉をいかに嚴格に査定しても、それは豫定でしかない。撥解を指令した時点で、いまだ可能態でしかないものをもって、現實を制することができないのは道理である。こうして、正額錢糧に對する戸部の支配は十全ではなく、外省が様々の理由をつけて、京餉の起解を拒んだり、「改撥」を請うたりする事態をいたすわけである。

引文中で、巡撫が部撥を受けた項目について、すでに「動支」済みであることを理由に部撥にしたがわれない、という狀況が述べられていたが、ここで錢糧の動支、あるいは動用が問題とされていることには、次のような背景があった。

戸部は三藩の亂による財政難のさなか、康熙一七年に、

各省、錢糧を動用するに、司・道等の官はすべからくまず督撫に申詳し、（督撫は）預め題明を行なうべし。もし申詳題明せずして、竟に奏（銷）冊に入れて（開）銷を請わば、銷を准さず、……^②。

という規定を設け、正月撥餉の際に指撥したもの以外に、錢糧を動支することを規制しようとした。ところが、財政狀態の改善とともに、規制がゆるやかになってゆくのを確認できる。一七年の規定では「正に用兵しつつありて、刻として緩すべからざる時」に限って、「一面申詳具題、一面動用」を許すという例外措置が認められているだけであつたのが、康熙三十一年になると、「陵上への供應、並びに緊要の事務に用いる所」が例外措置に加わり、更にその三年後には、「嗣後、現今用うべきの錢糧は、該（巡）撫、一面動用し、一面（戸）部に報ぜよ」という規定となつた。^③④ こうして正額錢糧の動用も、戸部の指示をまたがずして、督撫の權限で、實行できるようになつていたのである。

實錄の康熙四四年五月甲戌の條には、江蘇省へ十五萬兩の協餉を命ぜられた直隸巡撫が、解るべき錢糧がないとの理由で、他省へ改撥することを奏請した、との記事がみえるが、こうしたことは、頻繁にあったと見るべきである。外省は制度の不備を利用して、むしろ積極的に撥解を免かれようとしていた。雍正四年の上諭のなかに、

従前、戸部の春秋二撥、歲底大撥の時、各省はともに、講究して京餉を撥解するを免かれんと冀うことあり。もつて藩庫の錢糧、虛收・捏報・掩飾・彌縫の弊、一にして足らざるを致す。^{③⑤}

とあり、また八年にも、

従前、直省のまさに起運を行なうべきの錢糧、該省の撫・藩は、部に解るをもつて艱しとなし、撥解の時に至る毎に、百計營求し、備公、協餉の名に借りて、本省に存留し、戸曹の堂(官)・司(官)もまた就中(そのなか)に利を漁り、情(わい)に徇いて雜項・稅課を盡く(布政)司庫に留めしめ、たとえ正項なるも、部に解るはまた寥寥たるに屬し、もつて外省の撫・藩は、庫に存するの名色に籍りて、^{③⑥} グルになつて 通同して那用す。州縣も效尤(みならつて)してまた肯(あ)えて隨徵隨解(徵收してすぐに起運する)せず。官侵し吏蝕みて、虧空纍纍たり。……

との上諭を下していることから窺える。

布政司庫に錢糧をとどめおくことが、虧空發生を惹起する、との指摘がここで見られる。從來の制度のもとでは、虧空を生じ易いという問題があるのみならず、虧空が巧みに隱蔽され、戸部は實情を知るのが容易でない、という問題も生じていた。奏銷制度は、本來、挪用、侵欺などの不正を防止し、戸部の監督權を強化しようとするものであったが、虧空の發見ということでは、無力に近かつたようである。これは、地方諸庫の盤查(會計監査)制度が不十分であったためである。康熙二八年より、奏銷時に巡撫が布政司庫の錢糧を盤査することとなっていたが、^{③⑦} 両者が「通同作弊」しているのであれば、全く無力であり、また現實にもそうであった。^{③⑧}

康熙二三年、監察御史李錦の上奏に、

各省のあらゆる錢糧は、ともに藩司の掌握にあり。たとえ虧空あるも、なお後を指し前に抵つべし。

とあるが、挪移、侵欺などで虧空が生じていても、後で入庫した銀兩でもって書類の上だけ穴をうめ、その場しのぎをして戸部の眼を欺くことは、督撫と意を通じておきさえすれば、何の造作もなかったわけである。

虧空の原因、その形態などについて、ここで詳しく述べることはできない。ただ、康熙末の虧空問題の背景として、新疆の軍務や、よく言われる康熙帝の「寛大の政」による吏治の混亂とともに、上述の動支規定の緩和や、會計制度上の問題を、あわせて考える必要がある、とだけ指摘しておこう。

康熙時代後半から、有效な對策のたてられないまま、虧空は累積し、その末期には州縣庫、道庫、司庫、そして戸部銀庫に至るまで、この問題をかかえないものはなかった。康熙末の最大の政治問題は錢糧虧空であったと言つて過言ではない。それは即位後ようやく十日あまりの新帝、雍正帝に、怡親王允祥を總理戸部三庫事務に任じ、つづいて怡親王、隆科多、白潢、朱軾に命じて、すべての錢糧奏銷を、四人に合同辦理させる、という行動をとらせた。怡親王らは、別に衙門を立て、郎中以下の官員を置くことを請い、この衙門は雍正帝によって會考府と命名される。財政清理に關して、非常事態宣言が下されたのである。

兄雍正帝の切り札として登場した怡親王が戸部の總理となつたとき、「この時、國家は休養蕃息し、民物康阜たり。成賦は歲入すでに多く、經費浩穽たり。簿籍ますます冗にして、蠹弊叢集し、……案牘は壅滯累積す」という狀況であつた、と張廷玉はしるす。⁴⁰ そのなかで彼は、戸部が國家財政の統轄という機能をはたすためには、各省の「實在存庫の款項・數目」を的確に掌握しておくことが不可欠であることを認識した。戸部が、各省に對して撥餉を行なうその時點での、各庫の現存銀數を知るために、春秋季報冊の制度が、彼によって提起された時、中國の財政制度の歴史は、小さからぬ一步を、前へ進めることとなつた。

三 酌撥條例とその體制

春秋季報冊の制度の概要は、彭雨新氏の見解にしたがって、すでに説明した。ここには、雍正二年十一月二六日の怡親王の原議を、『戸部奏咨』によって、原文のまま引用しておく。^④

自雍正三年爲始、令直省每春秋二季、造具現年徵收何項若干・動用何項若干・現存何項若干清冊送部。臣部于二季酌撥・年終大撥時、將其確存款項數目、酌撥各省兵餉・驛站・官役俸工及充協餉外、餘悉令解充京餉。……………春季應送清冊、務于二月二十以前到部、秋季應送清冊、務于八月二十以前到部。如違限不到、臣部卽行題參、交部議處。

この「清冊」が季報冊である。後にはもっぱら「撥冊」と言われるようになるので、本稿でも撥冊と言うこととする。怡親王は、この撥冊を造送させることの利點を、左のように指摘している。

かくの如くすれば、則ち臣が部の撥する所は、みな寔徴して庫に在るの數にして、直省は、「敷らず」、「未徴」をもつて籍口するを得ず。既に文書駁詰の往還を省くべく、また改撥・那移の紛擾を除くべし。錢糧はおのおの疑「款」項に歸し、混淆を致さず。國帑・兵餉において均しく裨益あるに似たり。

雍正帝は、この提案に對し、卽日に「狼〔很〕好、着照行」との硃批を與え、戸部は原奏を抄録して各省に咨行し、新定の酌撥條例の實行を指示した。この酌撥條例のなかでは、從來よりの估餉冊（『預估冊』）について、何も言われていないが、春秋撥冊で報告された確存銀數のうちから酌撥される「兵餉・驛站……………」の數量は、前年冬に届いた估餉冊にもとづいて、算定されたものである。乾隆の『會典則例』、『戸部則例』以後の諸書は、春秋撥冊の規定と估餉冊の規定を、必ず一組のものとして記載している。

この酌撥條例では、收支に餘裕のある省では、本省に酌留して留支に充てるもの、協餉に充當するもの、及び「別に需めるところがあり、撥用を請う」^⑤たものを除き、餘剩銀兩は、悉く戸部へ解らせるのが原則であつた。こうすれば、確か

に虧空を掩飾することも、また督撫、布政使が、挪用など戸部の指示に遵わず、便宜に事を行なうことも、困難になるわけである。しかし一方では、地方にいくばくかの財政的餘裕をもたせておかなければ、非常時に、時宜にかなった措置をとることもできにくくなる。こうして、雍正五年正月二日、戸部は封貯の制の創設を奏請した。^{④③} これもただちに裁可され、各省の「地方の遠近大小・錢糧存剰の多寡を酌量して」、春撥の京餉のなかから一部を封貯させることとなった。酌撥制度の整備は、こうして封貯制の制定をも促すこととなった。

估餉冊、撥冊は、清冊（『青冊』）として外省から直接戸部へ咨送された。黃冊が御覽に付されたのち、内閣大庫に保存されていたため、今日でもその一部を見ることができのに對し、清冊は戸部に保管され、幾度かの火災、戦災に遇い、ほとんど見ることができない。『會典則例』によると、「春秋撥冊」は三種「冬撥估餉冊」が四種あったようである。^{④④}

奉文酌留封貯備用冊

春秋撥冊

徵收各項舊管・新收・開除・實存四柱冊
分晰應留・應撥細數冊

冬撥估餉冊

督・撫・提・鎮・標・協官弁兵馬應支俸餉冊
各項實在貯庫銀冊

額徵地丁民賦冊

額徵雜稅冊

名稱からその内容は推測されるが、それぞれがどのような體裁のものであったかは、右にのべた理由から不明である。

以上が雍正時代に整備された酌撥制度の概要である。次にはその運用の状況や、その效用などを考察してみよう。さきに述べた如く、この制度は戸部による國家正額錢糧の管理を強化し、地方の出入を制して、京餉、協餉が戸部の指示どおりに行なわれるための條件をつくるものであったが、それは地方からすれば、實質的な便宜行事の權の縮少をまねくものであった。施行當初より、當然抵抗はあった。雍正四年の上諭には、^{④⑤}

怡親王、戸部を總理してより以來、凡事公を乗り正を持す。撥餉の一項においても、みな地方の遠近を斟酌し、錢糧の多寡を詳核し、みな實に據りて、預先に奏（聞）し、朕が定奪して後、方めて分撥を行なう。四年以來、假借する

なきは、各省もまたまさに曉然として明白なるべし。しかるになお愚昧の人、（戸部の）吏役に私囑し、暗かに賄賂を行ないて、もって撥（解）を免かれんと冀い、その巧に遷避する者は、實存數目をもつて盡くは開報せざるあるを聞く。けだし各省督撫は、身は遠方に處り、戸部の撥餉は悉く至公より出づるを深く悉る能わずして、すなわち吏胥の愚弄する所となるのみ。

とその狀況を傳えている。また賄賂も通じず、撥解を餘儀なくされた場合でも、起解する際に銀兩のめかたを軽くしたり、解送にあたる官員のポケットに一部を取り込んだり、ということもあつたらしく、雍正帝は嚴しくその手管をあばいている。^{④⑥}外省の官員らが、かくもさかんな抵抗手段をくり出すのは、それだけ酌撥制度が嚴格に實施され、京餉への吸い上げがきつかったことを物語る。

また外省の挪用、虧空を抑制するという所期の效果も、着實にあがつたようである。安徽布政使石麟は、藩庫の錢糧のごときは、従前多く虧空・侵那の弊あり。我が皇上の御極以來、特に春秋貳撥を造報するの法を設け、季を按じて撥解せしめ、藩庫の虧空は掩飾すべくもなし。^{④⑦}

と報告している。また河南巡撫田文鏡も、

各省の錢糧、毎歳の正供の入る所のごときは、俸食・兵餉・工役・動用の外は、春秋二撥にて悉く部に解らしむ。一はもつて府庫（＝戸部銀庫）をして豐盈たらしめ、度支をして優裕たらしむ。一はもつて外官の侵蝕を杜ぎ、稽查に易からしむ。政、誠に善きなり。^{④⑧}

と、些かの追従の辭はあろうが、高い評價をあたえている。實施して數年後には、雍正帝をも満足させるほどの效果があらわれたようで、八年九月の上諭では、^{④⑨}

これより各省は、敢えて虚收虚報の弊をなさず、地方の大吏も、またみな怡賢親王の秉公持正の心は、もつて幸免を營求すべからざるを知る。ここをもつて、虧缺ようやく清く、帑藏充裕たり。

と述べている。

酌撥條例を適用され、春秋撥冊の造送を義務づけられたのは、布政司の錢糧に限らない。鹽課、關稅なども、その省の地丁收入が支出に足りない場合には、やはり戸部の指示で布政司庫に送られることもあったし、協餉として他省へ起解されることもあった。こういう手續きをする必要上、やはり春秋二季には現存銀數を戸部へ報告し、部撥を受けたのである。^⑤

雍正二年に奏准された春秋撥冊制と、それ以前から行なわれていた、估餉冊制を骨子とする酌撥制度は、以後大きな變更を加えられることはなかったようである。ただ、道光七年、蘇州布政司の胥吏を長年勤めた、華琳なる人物の述録した『蘇藩政要』（布政司胥吏のための實務指南書である）には、「三撥估餉冊、係春・秋・歲三撥季冊也、……」とあって、春秋撥冊と同じ性質の「歲撥估餉冊」（春秋撥冊も、ここでは春撥估餉冊、秋撥估餉冊と呼ばれている）が、預估冊とは別に作られ、十月内に戸部へ送られることとされている。^⑤會典や則例の規定とやや異なるが、全體としての機能は同じであると見てよいだろう。ともかく、道光時代に至っても、撥冊、估餉冊の造送は遵守されていたわけである。

通常、京餉、協餉の撥解を指令されるのは、毎年相當の黑字を出している省に限られたが、それ以外の省でも、臨時に撥解が行なわれることがあった。福建では、布政司へ起運される地丁が一〇四萬兩餘、それに對し支出は一四四萬兩餘りであり、不足分は歷年「部を奉じて、鹽課・關稅および各案の存庫留備銀兩を動撥して」補っており、むしろ、京餉、協餉を解することはなかった。しかし、閏月のある年を除き、毎年四、五萬兩と、わずかではあるが、餘剩があった。酌撥條例施行後數年のあいだは、これも厳しく京餉にとりたてられていたが、雍正一一年より起解を停止し、本省に留めて經費に充てることとなっていた。これが積り積って二八〇萬兩にもなり、「乾隆二三年の春撥案内に、部を奉じ銀一百萬兩を撥解し、續いてまた部を奉じ、江蘇省協餉銀二百萬兩を撥解した」と記録されている。^⑤春秋撥冊によって各省の實在存庫銀數を掌握している戸部は、このように、必要とあらば、隨時にそれを移動させることができた。各省の正額錢糧は、何處に收貯されるを問わず、國庫金として、戸部の支配のもとにあったわけである。

さて、ここまで述べてきた酌撥制度の機能を通じて、清代國家財政における、中央と地方の間の財政權のあり方を考えてみよう。冬估、戸部による撥餉、春秋撥、奏銷などが實行されることによって、外省の正額錢糧の收支は、すべて中央戸部の支配するところとなり、地方の官衙は、いわばその代理として收支を管領するにすぎなくなる。正額錢糧の範囲のうちには、地方の財政權によって運用される、地方財政の成立する餘地は、まったくないわけである。地方の財務衙門や、一般の行政衙門に附屬する諸庫は、おびただしく分岐してはいるが、そこでの正額錢糧の收支は、戸部からすれば、戸部銀庫の收支を操作するのと同様に、中央戸部によって遠隔操作されているのである。酌撥制度の整備は、戸部銀庫と地方諸庫とを、動態的に結びつけ、それらを統一的な、ひとつの國庫としたと言えよう。顧家相の『浙江通志釐金門彙』は次のように述べる（巻中頁八一九）。

泰西は、國家稅と地方稅とを分けて二となすが、中國では從來區別がなく、定名も立てられなかった。民間の輸^{おき}める所は、織^{せい}悉も必ず戸部に報じ、春秋撥冊において、某項は某款を動支する、というように、戸部が預め定め、布政司は奉行するのみで、敢えて擅^{かつて}専しない。

一方、こうした正額錢糧の、理念型とすれば極度に集權的な財政の體系の周圍には、それに附着するかたちで、實質的な地方財政とも言うべき體系が存在する。人民の負擔からしても、またそれを介して果たされる政治機能の點からしても、それは、國家の正額錢糧と國家財政と匹敵する、あるいはそれを上まわる規模と重要性を有していた、と言えるかもしれない。

この「地方財政」の體系は、正額錢糧のそれとは明確に區別され、さらに幾分の曖昧さをのこしながらも、二つの領域にわかれると考えられる。一つは、官の役得、吏の手數料、また稅糧徵收に附隨して官、幕友、胥吏の分肥に供される私徵、加派など、個人に歸着する「私」の領域であり、他の一つは、堤解された耗羨、歸公された陋規、また公事のため上級官廳の認可を受けて徵收される捐款など、「公」の領域である。前者が、「私」として、ある許容範圍内では、他から

の干渉を受けないのに對し、後者には報銷の義務が課せられるなど、特に雍正期以後、それに對する規制が強められる趨勢にあった。^{⑤③}しかし、「私」の領域は言うにおよばず、公項、公費銀など「公」の領域に屬するものでも、國家財政と對置されるような、それ自體明確に制度化され、財政制度のなかに、正當にくみ込まれたものとはならなかった。それは、公項などが、獨立した置き場所をあたえられず、正額錢糧の置き場所である諸庫に、廂を借りるようなかたちで存貯されていたことに、よく示されている。「公」の中間的な性格は最後まで拂拭されることはなかったのである。國家財政は、その固い殻の表面に、どこかぶよぶよとして曖昧なところのある、しかもなくてはならぬ「私」「公」の財政を附着させている。清朝國家の財政を全體としてながめれば、こういうスケッチができるのではなからうか。

四 酌撥制度の崩壞

乾隆時代には、臨時の戰費支出は別として、經常經費の増額がなされ、既にこれを憂える論者もあった。^{⑤④}その一方では収入の増加もみられ、財政は安定していた、と言えるであろう。嘉慶以降になると、今度は正額錢糧の収入減少が、様々の分野にあらわれてくる。まずは地丁の未進が徐々に増え、更に嘉慶、道光の交あたりから、各地で鹽政が崩壞しはじめる。^{⑤⑤}また、關稅收入も、乾隆三十一年の五四〇餘萬兩から、嘉慶一七年には四六〇餘萬兩、アヘン戰爭直前には、やはり四七〇—四八〇萬兩前後と、六〇〇—八〇〇萬兩は減少している。^{⑤⑥}こうした収入減少の背後に、どのような原因がはたらいっているのか、この問いに答えるのは、容易なことではないだろう。ここでは、ただ収入減少という現象がみられたことを、指摘するにとどめる。

収入減が收支平衡惡化の原因となるのは、言うまでもないが、他にもう一つの原因があったようである。道光時代になると、これに對して警鐘がならされはじめた。^{⑤⑦}

道光三年、戸部は近三年來の收支の比較を上呈した。この結果として發せられた上諭^{⑤⑦}では、收支の惡化は、「實に、定

額ありて、まさに支すべきの款は、勢として減らすこと能わず、その定額なきものも、また意に任せて加増するによる」、つまり定例外の支出増にあるとされ、また「かくのごとく紛紛と（臨時支出を）陳請すれば、將來要需に遇有するも、必ず籌撥するによしなきを致さん」として、各省督撫に、任意に錢糧を動支、墊賠したり、定例に違反して、格外に支出を請うことを得ざれ、と戒めている。「任意に加増す」と言っても、外省が勝手に支出するわけではなく、「紛紛」と題請、あるいは咨請を行なうたうえでのことであろうが、ともかく例外の支出増が、憂慮すべき程度にいたっていたのである。もっとも、こうした事態が、すぐに戸部による正額錢糧支配を崩壊させたわけではない。道光十二年の戸部の上奏によれば、道光十年以來、各省の軍需、賑卹、河工などの支出によって、二千餘萬兩の赤字がでたが、「現在、酌撥はなお支絀なし」と言っているのをみると、戸部の酌撥制度は、まだうまく機能していたようである。

道光十五年月の上諭^④によると、事態はやや惡化しつつあったように考えられる。

近年以來、各省の地丁・稅課の積欠、頻りに仍り、毎歳の額徵において、已に年ごとに年の款を清^{せい}する能わず。たとえ徵存して（戸）部に報ずるの項も、また隨時に解撥せず。該部の節次^{しやうし}に嚴催^{げんさい}するを経るも、仍りてまた日久しく

右延す。

ここでは、季撥冊のなかで徵收ずみと報告しても、戸部の指示に遵わず、銀兩を起解しないことが、槍玉にあげられている。未徵收の項を、いつわって徵收ずみと報告したのか、挪移、動支によって、虧空が生じたのか、いずれかであろうが、戸部の酌撥に應じない省があるというのは、やはり戸部の財政支配の低下を物語る。同じ上諭のなかで、各省の司庫、道庫に收存する、「餘存の入撥銀三百九十五萬五千餘兩」が、戸部の催促にもかかわらず、季撥冊内に造入されない、という事實も指摘されている。中央が「嚴參議處」を手段として、こうした違法措置に對處しても、なお阻止できないのは、相對的な吏治の頹壞が進んだということかもしれない。しかし、季撥冊に不法に造入されない銀兩の數目を、戸部が掌握している（恐らくは奏銷冊と季報冊を、つきあわせることによって）、ことからしても、正額錢糧にたいする戸部の支

配は、些か蝕まれたとは言え、なおも失なわれてはいなかった、とみるべきであろう。

酌撥制度にもとづく、財政統轄のあり方が、根本的に變化するのは、咸豊期になってからである。言うまでもなく、太平天國の一撃によってであった。

『湘軍志』の著者、王闓運は、その間の事情を次のように記している。^⑥

洪寇の興るや、始めは部より餉を籌り、軍に撥するもの、六百餘萬。その後、困竭して、則ち空文をもって指撥す。これを久しくするに、空も指すべくなし。諸將帥も、またその無益なるを知り、すなわち各各自ら計をなす。

戸部の酌撥制度の崩壞によって、地方督撫らが、軍餉を自籌することを餘儀なくされた、と彼は主張している。前章で述べた、清朝國家財政の根底が掘り崩されたことを、これは意味する。

春秋撥によって京餉を確保することができなくなると、毎年定額の京餉上供を、各省にわりあてゐる、攤派制が登場することとなった。のち、軍機大臣奕環らが上奏するところによると、それは咸豊三年のことであった。^⑦

咸豊三年より、各省の春秋報撥は、並びて存款なきに因り、戸部は始めて、改めて年を按じて數を定め、指撥して部に解らしむ。

各省よりの春秋撥冊に、「存款なし」とあるのを理由に、定額の京餉起解を要求する、とはまったくの非合理であるが、現實はこの非合理の方へ進んだ。^⑧ その年の十一月、戸部は「部庫の歳需の銀兩を、冬撥案内に歸して辦理する」ことを奏請し、次のような決定が下された。

あらゆる該部の歳撥の京餉は、著准して本年より始め、冬撥案内に歸入し、各直省の協撥兵餉と一律に酌撥せしむ。

.....

形式のうえだけ、從來の冬撥＝歳撥の手續きを経て、「酌撥」を行なう、と言うわけであるが、實情は酌撥ではなく、純然たる攤派であった。これ以後、清朝滅亡に至るまで、京餉、内務府經費、海軍費、賠款など、すべて各省および海關へ

の攤派によってまかなわれた。

太平天國期以降の清朝財政、特に「督撫重權」という現象が、財政の面でどのようにあらわれたか、というのは、非常に興味深い問題ではあるが、これはまた別の機會に論じよう。ただ、一旦崩壊した酌撥制度が、同治後半から日清戦争までの、相對的に安定していた時期にも、ついに恢復されなかったのはなぜか、という問いについては、簡単に私の考えをのべておこう。

非常に單純化して言うと、それは収入、支出のいずれにおいても、從來の正項錢糧の項目の範圍外に出るものの比重が、爆發的に膨脹したからである。前章の末尾で述べた圖式にあてはめれば、釐金に代表されるような新たな收入項目は、正額錢糧、すなわち國家財政に屬するものではなく、地方で措置された「公」と「私」の領域のうちにあるものであった。國家財政の破綻は、たとえば「公」の領域中の釐金收入などからも、京餉その他の經費を捻出することを、餘儀なくさせた。しかし、膨脹した「公」「私」の領域は、更に重要性を増したにもかかわらず、やはり從來のとおり、國家財政の外側に、はっきりと制度化されることなく附着し、中央戸部からは非常に弱い支配しか受けない、という性格を變えることはなかった。この時期に「外銷」經費ということばが新たに登場する。それは、「内銷」、すなわち戸部への奏銷を義務づけられた經費＝國家錢糧と對置され、地方で處理される經費のことである。こうした經費は、いよいよ重要性を増したにもかかわらず、國家財政の體系のなかに取り込まれることも、また近代國家における地方財政の體系として、制度化されることもなかった。これと同時に、從來の國家財政を構成していた地丁、鹽課、常關稅（海關收入を除いて）などは減少し、ふくらんだ國家財政の支出を、まかなうことができなくなった。中央戸部が、直接的には支配していない「公」の領域から、その不足分を補給しようとするれば、それは必然的に攤派という方法によらざるを得ないわけである。庚子賠款以後、種々の攤派は激増して、「公」「私」の領域を確保しようとする地方との間に、きびしい對立が生じ、ついに、中央と地方との分裂という局面も、また必然的に到來した。行きついたところが、本稿のはじめの引文中にみられた、あ

の姿であった。

おわりに

雍正二年の酌撥條例の制定は、從來の正月撥餉、および京餉協餉の起解制度のうえに、季報冊（『撥冊』）の制度を加えることによって、地方諸庫における正額錢糧の出入の動態を、戸部が適時に把握することを可能とし、また、各庫の實情にもとづいて京餉協餉を指撥して、全國的な國家財政の調節を、有効に行なうことを可能とした。こうして戸部銀庫と地方諸庫とは、前者を結合の核として、有機的に聯節され、一つの國庫として組織された。國家の正額錢糧については、戸部による支出項目・數量の指撥を、「布政司は奉行するのみ」（本稿頁一四五參照）という、徹底した集權的支配が實現したわけである。

太平天國を契機として、從來のわくを越える財政の運用が必要となった時、國家財政におけるウルトラ集權支配——この外側には、「公」「私」の財政の領域が曖昧に附着しているのだが——換言すれば、制度化された地方財政の缺如が、これに適應することを却って阻げた。まずは、中央の酌撥制度にもとづく財政支配が崩壊し、ついには、「數千の小國、各自計をなすに異ならず」^③、また經費の配分をめぐる、中央と地方が、相い争い相い欺くという、まったくの分崩離析が、もたらされたのであった。

近代の統一國家形成に際しては、中央と地方による行政、財政の機能的合理的な權限の分轄と統制とが、制度的に確立されることが、その必要條件であった。舊來封建分立的な政治形態をとっていたところでは、この移行がスムーズに適合的に行なわれたのに對し、清朝治下の中國のごとき專制的集權國家は、更に困難な道をへて、この移行を實現せねばならなかった、と言うこともできよう。

本稿は、もとより清代の財政全般について述べるのを目的としたものではない。私の考える「公」「私」の領域につい

ては、何らその具體的内容に言及しなかったのみならず、國家財政の内部で發生した虧空、とくに嘉慶から道光時代に、再び重大化した虧空の問題などに、論及することができなかった。後日の課題としたい。

註

- ① 軍機大臣慶親王奕劻等奏、「議覆度支部奏請清理財政、宜先明定辦法摺」、中國第一歷史檔案館藏 清度支部（戶部）檔案、一五—三／24／2224。以下、本稿で用いる檔案は、別に明記しない限り、すべて中國第一歷史檔案館所藏のものである。
- ② 彭雨新「清末中央與各省財政關係」『社會科學雜誌』第九卷第一期 一九四七。
- ③ 同前、頁八三—八六。乾隆四十六年の「戶部則例」卷二〇庫藏の項、春秋撥と題された規定を引用しておく。
- 一、各直省司道庫儲錢糧、該督撫每年於春秋二季、將實在存庫銀兩、造具春秋撥冊報部。戶部覈明數目、存留本省支用、及協餉之外、餘悉解部充餉。
- 一、每歲冬季、各直省督撫、各將次年一歲應需俸餉、預估冊報、聽部按數撥給。凡撥協餉銀、先儘鄰近省分、再及次近省分。其別有急需應協濟者、仍於鄰近省分通融撥協。儻藩庫銀兩不敷、或動鹽課、或請內帑、由部隨時具奏。
- ④ 『世祖實錄』卷九頁一二、順治元年十月甲子。
- ⑤ 同前、卷一七頁八一—九、順治二年五月丙寅。
- ⑥ 同前、卷四一頁十、順治五年十一月辛未。
- ⑦ 同前、卷三〇頁一六、順治四年正月癸未。
- ⑧ 同前、卷二五頁二四、順治三年三月壬寅、卷二九頁三、同年一月丁未。編纂の實務は州縣で行なわれたようである。秦世禎「撫浙檄草」、『清史資料』第二輯 一九八一、所收、頁一七五、一八一、一八四參照。
- ⑨ 『清史稿』卷二六三、王弘祚傳、中華書局版頁九九〇二。
- ⑩ 順治十年七月六日戶部題本、清順治朝題本奏銷類16。以下檔案の分類は「順・題・奏銷」ように略記する。
- ⑪ このため布政司は、毎年年頭に、「將應解司庫、及州縣存留應支銀數、一一撥定、造具簡明總冊、核定後、發州縣遵照解支」という手續きをせねばならなかった。康熙四十七年六月二十六日戶部咨文（雍正〇年（殘缺）雲南巡撫楊名時題本、雍・題・奏銷60、所引）。
- ⑫ 佐伯富「清代における奏銷制度」『東洋史研究』第二二卷三號 一九六三、にくわしい。
- ⑬ 「請申嚴就近撥餉之制、以無悞軍需事題本覆稿」、康熙七年二月題、『堯峯文鈔』卷一頁三一—四。
- ⑭ 順治一八年八月二日戶部題本、『清代檔案史料叢編』第四輯 一九七九、頁八、參照。また、順治十七年正月二日洪承疇揭帖、『洪承疇章奏文冊彙輯』 一九三七、頁二〇五。
- ⑮ 雍・題・糧餉？。
- ⑯ また、康熙五十七年九月九日兩廣總督楊琳題本、康・題・奏銷

23、には、廣東省が康熙五十六年分兵餉の歲需を見積って冊報してきたのに對し、戸部はその財源・數目を指撥して、五五年一月二二日に題准を得て、巡撫に咨報したことが見える。「正月發餉」の手續きは、前年一二月内になされていたことがわかる。

①7 雍正二年六月一日吏部題本、雍・題・例行35、に、

查得、戸部咨稱、直隸巡撫李維鈞、以直屬各鎮營應需雍正貳年俸餉等銀預估冊、准咨行令拾月內到部。今拾月已終、尙未送到……。

とみえる。

①8 『皇朝文獻通考』卷四〇頁二。

①9 『文獻叢編』第二輯 一九三〇、頁二四。

②0 黃冊二八四九。

②1 年代は下るが、王慶雲『熙朝紀政』卷三頁五二に、戸部銀庫の支出として、

道光二年 九、四六〇、七〇二兩零

三〇年 九、五六四、〇五九兩零

咸豐元年 九、五六九、九一一兩零

という數字があげられている。

②2 例えば、地丁錢糧から得られる京餉は、布政司への起運分から出る。そこで平時においても、州縣では存留款項よりも起運を優先するべしという規定があった（康熙『大清會典』卷二四頁二九）。また州縣官の方でも、存留分は自らが支給する項目であるから、緩くすることもできるが、起運は「緊要」である、と意識されていた（『福惠全書』卷七頁一五）。

②3 『熙朝紀政』卷三頁五二。例解部款、常捐などのほかは、

「不敷銀、隨時奏聞、於盈餘省分地丁・鹽・關、指款解部庫。無定額」とあるように、定額がなく、春秋撥制によって撥解される京餉によってまかなわれる。

②4 康・題・奏銷26。

②5 「正月發餉」の際の戸部の咨文には、「其本年截贖・小建・下剩等銀、扣存司庫、照例奏報、聽候部文、撥充下年兵餉」という文言が、必ず添えられていた。康熙五十七年九月九日兩廣總督楊樹琳題本、康・題・奏銷23、および、雍正元年二月五日湖廣巡撫納齊略題本、雍・題・糧餉1に、それぞれ引用する戸部咨文。

②6 康熙五十九年九月二四日戸部題本、康・題・奏銷22。

②7 註②3に引いた『熙朝紀政』の記事参照。

②8 雍・題・鹽務2。

②9 地丁の徵收は、上忙、下忙の二期にわけて行なわれた。原則としては、春には、前年の下忙分が徵收済みであり、秋には、當年の上忙分が徵收済みで、それぞれ布政司に起運され終っている。この二季に京餉の起解が命ぜられたのであろう。

③0 雍正四年二月二八日奏。清華大學圖書館藏『戸部奏咨 雍正元年至乾隆十二年』不分卷 鈔本、第二冊、雍正四年五月二日到の戸部咨文中に引用されたもの。この鈔本の書名は、同圖書館でつけたものであろうが、内容は、貴州省の巡撫衙門に届いた戸部の咨文を鈔録したものであると、判断される。

③1 『戸部奏咨』第一冊、雍正三年正月八日到の戸部咨文。

③2 『聖祖實錄』卷七二頁四一五、康熙一十七年三月辛巳の條。

③ 『大清會典』卷三一頁八。
 ④ 同前、頁八一九。

⑤ 『戸部奏咨』第二冊、雍正四年二月二日到の戸部咨文に、十月二日内閣交出として引く。また『世宗憲皇帝上諭内閣』卷四九頁三〇（十月一日）にはば同文を載せる。

⑥ 『雍正朝上諭檔』卷三頁二七、雍正八年九月十日條。『史料叢編』所收。また『世宗憲皇帝上諭内閣』卷九八頁五一六（九月一日）にはば同文を載せる。

⑦ 『清史稿』卷一二一、食貨二、頁三三三〇。

⑧ 雍正元年二月九日署甘肅巡撫事傅德題本、雍・題・田賦11、に、左のように言う。

值日御史條奏內稱、藩庫爲錢糧總匯、典守綦重、責在藩司。查盤虧足、責在巡撫。各宜奉公守法、不容少有假借。但撫藩情好易密、多至相爲表裏。藩司侵那、則力懇巡撫代爲掩護、巡撫濫用該藩司、不得不一一應付、以公帑之蓄儲、竟視爲私家之出入、而虧空遂不可數計。……

⑨ 康熙□年（殘缺）山東巡撫覺羅崇恩題本、康・題・田賦14。

⑩ 「敕撰和碩怡賢親王行狀」、『澄懷園文存』卷一四頁一、四。

⑪ 同註⑩。

⑫ 註①参照。

⑬ 『戸部奏咨』第二冊、雍正五年三月四日到の戸部咨文。また雍正八年には、帝自ら提議して、州縣にも銀兩を酌留して封儲することが定められた。

⑭ 乾隆『會典則例』卷三七頁五五一五六。

⑮ 同註⑭。

⑯ 『戸部奏咨』第二冊、雍正四年六月一四日上諭に左のように言う。

何以解京之項短缺俱如此之多。蓋緣各省藩庫季報實存銀兩、悉令撥解京餉、藩庫儻有虧空、不能掩飾、於地方官甚有不便。故將解部之項、輕平彈兌、或扣存於解官私聚、使必有短少、以見銀庫有彈兌苛刻之聲、明爲將來協撥存留、那移掩飾之計。

⑰ 雍正四年二月四日摺。『宮中檔雍正朝奏摺』第七輯 一九七八、頁六六。

⑱ 雍正三年七月六日摺。同前、第四輯、頁六二四—五。

⑲ 同註⑱。

⑳ 雍正四年八月二日戸部の議覆によつて「一應錢糧衙門」が春秋二季の造冊を義務づけられた（九月一日奉旨）。『戸部奏咨』第二冊。また同年一月二〇日到の戸部咨文には、「長蘆（鹽運司）」の報冊が未到である、と述べられている。

㉑ 『蘇藩政要』二卷、鈔本二冊。南開大學圖書館藏。同本は光緒一三年、汪圻なる人物による鈔本である。また『中央研究院歷史語言研究所善本書目』には、別の鈔本が著録されている。南開大學本は、別の『欽目源流』、『捐攤款目』、『稟稿錄』、『詳高錄』、『錢穀視成』の諸鈔本と一緒にして、『蘇藩政要』という書名のもとに登録されている。「三撥估餉冊」に關する記事は、卷上頁七一八。

㉒ 德福纂輯、佚名續輯『閩政領要』卷上頁一五。

㉓ 安部健夫「耗羨提解の研究——『雍正史』の一章としてみた——」（原載『東洋史研究』第一六卷四號 一九五八）『清代

史の研究』一九七一、頁七〇七以下で、「耗羨の正項化」が言われているのを参照。また清代の「公費」については、岩見宏「雍正時代における公費の一考察」、『東洋史研究』第一五巻四號 一九五七、などを参照されたい。

⑤4 阿桂「論増兵籌餉疏」、『皇朝經世文編』卷二六頁二九—三〇。

⑤5 地丁未進と虧空については、鈴木中正「清末の財政と官僚の性格」『近代中國研究』第二輯一九五八、鹽政については佐伯富「清代鹽政の研究」一九五六、を参照。

⑤6 『史料旬刊』第二二—三〇期（一九三一）に連載された、「案核嘉慶十七年各直省錢糧出入清單」の關稅項下の收入を總計すると、四六三萬餘兩である。また北京圖書館藏鈔本『歲出歲入簡明總冊』道光一八—二八年、によって、毎年の關稅項下の合計を算出すると、道光一八年〓四六八萬餘兩、一九年〓四八六萬餘兩である。乾隆三二年の數字は、『清史稿』卷一〇〇食貨六、頁三七〇三、による。

⑤7 『宣宗實錄』卷五〇頁一〇、道光三年三月甲戌の條。

⑤8 同右、卷二〇九頁一六、道光一二年四月丁亥の條。

⑤9 同右、卷二六八頁六、道光一五年閏六月乙丑の條。

⑥0 『湘軍志』籌餉篇、頁一。

⑥1 光緒一一年八月二日奕譞等奏、近代中國資料叢刊『洋務運動』一九六一、第三冊頁五四二。但し、彭澤益「一九世紀五十至七十年代清朝の財政危機和財政搜刮的加劇」（『歷史學』一九七九年第二期）は、預撥制から攤派制への移行を、咸豐六年とするが、その根據は示されていない。

⑥2 『文宗實錄』卷一一三頁二六、咸豐三年一月戊辰の條。

⑥3 趙炳麟「請統一財權、整理國政摺」、『政治官報』第二三三號 光緒三四年五月二三日、頁六。

〔附記〕 本稿で引用した中國第一歷史檔案館所藏の檔案史料は、同館より部分的引用の許可を得たものである。同館、また貴重書の閲覧を許可された南開、清華兩大學圖書館、北京圖書館に感謝し、あわせて筆者の導師として熱心な指導を賜わり、これらの資料閲覧のため手摺の勞を取って下さった、北京大學陳慶華教授、南開大學陳振江副教授に、深く感謝したい。

Another characteristic of the order's methods of discipline, the *silent dhikr*, also had an important effect on the expanding influence of the order, although this method deeply retained the aspect of secrecy. In the history of the order *vocal dhikr* was often used as the *dhikr* of the order. This fact evidences the continued existence of persons who opposed to the *silent dhikr* in the order.

PEKING AND PROVINCIAL GOVERNMENTS IN THE QING FINANCIAL ADMINISTRATION: ON THE SYSTEM OF FITTING ALLOCATION 酌撥制度

IWAI Shigeki

The enactment of *the regulation for fitting allocation* 酌撥條例 in 1724 introduced *the spring and autumn account register* 春秋撥冊 (=季報冊) to the Hubu, in addition to the existing system of *appropriation in the first month of the year* 正月撥餉 and the remittance to Peking and other provinces. According to this regulation, the Hubu managed the flow of gains and losses of regular fiscal items 正額錢糧 in the local treasuries at appropriate times. Furthermore, based on the actual state of the local treasuries, the remittance to Peking and other provinces was allocated. In this way, it became possible for the Hubu to adjust an efficient national financial administration. The local treasuries were united around the central Hubu treasury. Connected organically, both treasuries became linked together as one national treasury. Concerning the national government's regular fiscal items, the financial administration in each province only obeyed the expenditure provisions and the amount of allocations that were determined by the Hubu. A thoroughly centralized control was thus realized.

The national government's financial administration based upon this principle of "*bo* 撥" was changed after the Taiping rebellion into a system based upon the principle of "*tan* 攤" whereby a fixed amount equal to the capital's remittance was allocated to each province. This change manifests itself in the introduction of income of the *likin* 釐金,

for example, outside the system of the regular fiscal items. It originated in the fact that in the existing system the relative importance of the yearly income, which the Hubu could not entirely control, had increased.